View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

『モンテーニュの作品に見られる不定的用法を持つ複数代名詞 ils について』

海　堀　　勲

I

今日のフランス語では，複数代名詞 ils の不定的用法は殆んど廃用に帰し，文法家たちが語る様に現在では僅かに la langue populaire に残存しているに過ぎない。ils のそうした用法は，十六世紀だけに限定されず，ancien français に於いても存在していたようである。言わゆるシンタックスの近代的統一が完成する以前の古風な語法は，その多くのものが廃止されたが，本稿で取扱うilsの不定的用法も，一応この類の現象と考えること出来る。Darmesteter, Gougenheim, Voizard は，この現象をラティニズムと解釈している。(1) 又，多くの文法書は，十六世紀に ils＝on が成立していた旨を明記している。この点に関して G. Gougenheim は次の様に語っている：

> Au lieu de *on* on trouve parfois le pronom *ils*, peut-être par latinisme, en particulier chez Montaigne : ... (Grammaire de la langue française du seizième siècle — p. 70)

しかし on と ils との相違点については何も語っていない。E. Voizard についても同様である。多くの場合，on と ils との相違点に関しては，かなり微妙で解明は困難である。

そこで本稿では，あらゆる場合に ils＝on が成立するかどうかについて，個々の文脈と on と ils の動詞を考察しながら——モンテーニュの『エッセー』

と『イタリア旅行記』に関して――検討してみようと思う。

テクストには,《Œuvres complètes de Montaigne, textes établis par Albert Thibaudet et Maurice Rat, bibliothèque de la Pléiade, 1962》を,参考文献には主として上記の Gougenheim 以外に《Étude sur la langue de Montaigne, par E. Voizard, Slatkine Reprints, Genève, 1969》を使用した。

『エッセー』と『イタリア旅行記』に関して,先行あるいは後続する名詞や代名詞の代用をしない ils と不定代名詞 on との総数をそれぞれ調査した結果,次の様な概算が得られた:

表 1

	on	ils
エッセー	1800	230
イタリア旅行記	550	210

表1に示した様に,この二つの作品に於いて ils の総数に殆んど差異は認められず, ils の on に対する比率は『エッセー』が約8分の1,『イタリア旅行記』が約5分の2となり,『イタリア旅行記』の方が ils の on に対する相対数の多いことが分る。さらに『エッセー』が『イタリア旅行記』の約5倍の長さをもつことを考え合わせると,この点は問題にされるべきであろう。そうした理由により,二つの作品を比較の上検討していくのが妥当であろう。

例えば『エッセー』に於いて《人々は言う》の意味で, ils と on に関して次の様な文例が見られる:

(文例 1)

Socrates, qui a esté un exemplaire parfaict en toutes grandes qualitez, j'ay despit qu'il eust rencontré un corps et un visage si vilain, comme *ils* disent, ... (Essais III-1034)

(文例 2)

De Plato nasquirent dix sectes diverses, dict *on*. (Essais II-489)

上記の文例1，2では，on ditとils disent の示す内容はそれぞれ Platon と Socrates に関する事実であり，内容的に差程の相違は認められない。（内容から考えて，ils と on は一般的な意味に於いて対応していると推察出来る）

次に『イタリア旅行記』では，以下に掲げる様な文例が見受けられる：

（文例 3）

En may et en avril, *ils* disent qu'il y va assez de gens, mais la pluspart logent audit bourg ou à ce chateau du seigneur Pic, où logeoit M. le cardinal d'Este. (J. de V.- 1186)

（文例 4）

Nous descouvrimes, entr'autres, un chasteau a une hauteur de montaigne la plus eminente et inaccessible qui se presentast à nostre veue, qu'*on* dict être à un baron du païs, ... (J. de V.- 1172)

上記の文例3，4は，主人公の《私なる人物（実はモンテーニュ）》——この『イタリア旅行記』では《私なる人物》とその同行者たちを nous で呼び，モンテーニュは三人称で登場している——が旅行中に語り続けていく町々の様子の一節である。この場合も ils = on と考えられる。

しかし文例1の ils と文例3の ils は——文例2と文例4の on と同様に——それぞれ内容上かなり異質なものであり，文例1の ils は文例3の ils よりも一般的な意味をもち，意味論的領域が広いように思える。

従って，二つの作品中に表われる ils と on の用例をすべて抜き出し，両者の文脈的対応を観察することが肝要であろう。その方法として，表1に見られる様に総数に於いて ils より数の多い on の文脈を調査し，それと同一のあるいは類似した文脈で使われている ils とを比較しながら検討するのが適切であろう。

II

まず『イタリア旅行記』に於ける ils と on を比較してみよう。on と等しい

と考えられる ils は，主として習慣，産物，建築，設備，温泉，宗教，食生活 etc. に関して書かれてある箇所で見い出される。総数210の ils をすべて調査した結果，その大部分がそうであることが判明する。例えば次に示す ils と on の文例に於いて両者が大体類似した内容で使われていることが窺える：

（文例　5）

On est ici dans l'habitude de mettre de la neige dans les verres avec le vin. (J. de V.-1295)

（文例　6）

Ils ont encore en plusieurs lieus la coutume de mettre des parfums aus chambres et aus poiler. (J. de V.-1161)

（文例　7）

On a dans ces cantons-ci les chevaux à deux jules par poste. (J. de V.-1333)

（文例　8）

Les mulets de bagage, de quoi *ils* ont foison et fort beaus, n'ont leurs pieds de devant ferrés à nostre mode, ... (J. de V.-1245)

（文例　9）

A sa (="une petite maisonete") teste *on* a faict un moïen (="un mur de milieu"), lequel moïen a à chaque costé une porte de fer; (J. de V.-1247)

（文例　10）

Ils faisoint de grosses murailles de brique, et puis *ils* les encroutoint ou de lames de marbre ou d'une autre pierre blanche ou ... (J. de V.-1226)

（文例　11）

..., et jette-*on* des ais par le dessus pour éviter le soleil et la pluye (J. de V.-1123)

（文例　12）

Leurs lits, ce sont de petits mechans treteaus sur lesquels *ils* jetent des esses, selon la longur et largeur du lit; (J. de V.-1269)

(文例 13)

..., il y a trois jets différens d'eau chaude, de l'un desquels *on* use en boisson. (J. de V.-1320)

(文例 14)

... ; car *ils* sont encore ici dans l'usage de se faire donner la douche sur l'estomac (="la poitrine"), ... (J. de V.-1287)

(文例 15)

On y a moins de poisson qu'en France ; ... (J. de V.-1227)

(文例 16)

Ils ont raremant des soles et des truites (J. de V.-1227)

(文例 17)

Quand il (un des deux ministres vieus) eut achevé, *on* chanta un psalme en allemant, d'un chant un peu esloigné du nostre. (J. de V.-1150)

(文例 18)

A chaque verset *ils* attendent que celui là donne le ton au suivant ; *ils* chantent pesle mesle, ... (J. de V.-1154)

(文例 19)

On y servit force volaille rostie, revestue de sa plume naturelle comme vifve ; ... (J. de V.-1218)

(文例 20)

Ils y servent le fruit sur des assiettes. (J. de V.-1190)

ここで on に関してだが，表1に示した550の on のうち，上記の文例5～20のような形で ils と対応しうる on は，およそ300存在する。この場合の ils と on の動詞から数の多い主なものを抜き出して表にまとめると大体次の様になる：

表 2

	dire	servir	nommer	tenir	appeler	manger
ils	47	20	10	8	6	6
on	34	43	14	13	14	5

（このうち tenir は ils と on に於いて「考えている」の意が，servir は「(食物を) 給仕する」，「(食器類を) 持って来る」の意が大部分を占めている）

ils と on が表2の動詞と共に使われている文脈を調べると，大体次のことが言える。

● dire はすべてモンテーニュ一行が訪れる町の内部に関する内容について用いられ（文例3と4を参照），『エッセー』に於ける様な一般的な内容については見られない。この点は tenir についても同様である。

● nommer と appeler は，町の中のある場所や人物などの―― 例えば城，温泉場，司教――名称を示す場合に用いられ，manger と servir は食生活に関する場合である。

かくして上記の二点と文例5～20を考え合わせると，表2の ils と on の対応は，不定的用法に違いはないが，そのうちの「不特定なある集団（つまりこの場合「各々の都市の住民」）を示す用法と考えられないだろうか。このことは，次に示すところの on しか用いられていない残り 250 の動詞の特徴や文例によってかなり明確化されるであろう。

殆んど on にしか見当らない動詞のうち数の多いものを ils と on に関して表にすると次の様になる（ただし，この他に様々な動詞が見られる）：

表 3

	voir	trouver	découvrir	observer	sentir
on	82	14	7	4	9
ils	2	1	0	0	0

表3から窺える様に，観察や知覚を示す動詞は ils に関しては殆んど見られない。(その他 on についてこの種の動詞あるいは動詞表現は，deviner, apercevoir を含めて30箇所以上に渡って認められ，そこでも ils は使われていない。)

もしも『イタリア旅行記』に於いて，あらゆる場合に ils=on であるならば，表2と表3の様な極端な結果は出て来ないであろう。

表3の場合 on は「一般に人々」を示すことが多く，言わば「各都市」の様子の観察や評価をする立場にある人々であり，「住民たち」とは必ずしも関連性がない。つまり次に掲げる文例からも明らかな様に，表3の場合，on は厳密に言えば，「そこへ訪れる人すべて」のニュアンスを持っている，と考えられる：

(文例 21)

Dans une des places de la ville, *on* voit une colonne de briques sur laquelle est une statue qui paroît faite d'après la statue équestre d'Antonin-le-Pieux qu'*on* voit devant le Capitole à Rome. (J. de V.-1333)

(文例 22)

... ; *on* y sent seulement au goût une petite pointe, ... (J. de V.-1320)

さて表3以外に，on に関してのみ用いられる場合については，文脈的に検討すると大体次の様な結果が得られた：

1) 住民全体でなく，その中の不特定のひとりあるいは数人に関する場合：

(文例 23)

On le (un spiritato) tenoit à genous devant l'autel, aïant au col je ne sçay quel drap par où *on* le tenoit ataché. (J. de V.-1219)

(文例 24)

On les (deus freres) tenailla, puis coupa le poignet devant le dict palais, et l'ayant coupé, *on* leur fict mettre sur la playe des chappons qu'*on* tua

et entr'ouvrit soudenemant. (J. de V.-1211)

2) モンテーニュ一行に関係のあった不特定のひとりあるいは数人に関する場合：

(文例 25)

Après disner nous suivimes par les montaignes, où *on* nous monstra, entre autres choses, sur des rochers inaccessibles, les aires où se prennent les autours,... (J. de V.-1127)

(文例 26)

Là M. de Montaigne s'informant s'il n'y avoit point quelques sepulchres des François, *on* lui respondit qu'il y en avoit plusieurs en l'église S. Augustin;... (J. de V.-1201)

3) その都市とは別の国名や地名を明記してある場合(国名や地名を示す ici, là, y などの副詞を記してある場合を含む)：

(文例 27)

Icy autour, la pluspart des maisons sont voutées à tous les etages; et ce qu'*on* ne sçait pas faire en France,... (J. de V.-1171)

既述の文例5，7，15，19にもこの事実が窺える。

以上『イタリア旅行記』に関して，ils と on が同等の価値において見られる場合と，on しか見られない状況について考察してきた結果，次のことが言えるだろう：

即ち，『イタリア旅行記』に関する限り，ils＝on が成立するのは「各都市の住民」の意味範囲に於いてのみであり，換言すれば，on の用法のうち ils が持ちうるのは『不特定のある集団』を示す用法に限定されており，「不特定のひとりあるいは数人」や「一般に人々」を示す用法は認められない，ということになる。

III の 1

さて『エッセー』に於いて ils と on はどのようにして対応しているだろうか。

表1の箇所で既述した様に，『エッセー』では ils の on に対する比率は8分の1しかない。ところが，ここで留意せねばならないのは，この作品に見られる ils は，次に述べる様に大きく二分されるという点である。

つまり，表1に示した230の ils の中で文例1，2のように一般的な意味で on と対応しうる ils は僅か総数80しか見受けられないのである。残りの150の ils は，ある文脈に限って見られる場合と想定できるが，これについては次のⅢの2で述べよう。ここでは前者の ils に関して取扱う事にする。

表2にならって， ils と on に共通して見られる主な動詞を抜萃し，表にすると次の様になる。

表 4

	dire	nommer	appeler	réciter	tenir
ils	30	3	3	3	4
on	110	8	7	9	13

(tenir の意はここでも「～と考えている」が多く認められる)

表4と表2を比較すると， dire, nommer, appeler, tenir が共通して見られる。しかし，これらの動詞が使われている文の示す内容は『イタリア旅行記』の場合（表2）と全く異なっている。文例1，2を示した箇所でも述べた様に，個々の例は『イタリア旅行記』における ils のような限定的な要因は何ら認められないのである。

かくして不定代名詞 ils が『エッセー』に於いて認められる訳だが，用例が少なく又表4から推察出来るように，動詞がある程度限定されている点から，

あらゆる場合に on の代用が可能であるとは考えられない。何故なら表1に示した様に1800の on のうちで，文脈上，この総数80の ils と対応しうる on は実に約950箇所に存在するのである。そこでは「一般に人々」の意味をもっている訳だが，文脈的に on は――『イタリア旅行記』の表3の箇所で見た様に知覚や観察を示す言わば形式的主格と言うよりは――意味上の主格と解釈することが出来る。次にこの on の文例を掲げよう：

（文例 28）

On jouit bien plus librement et plus gayement des biens empruntez quand ce n'est pas une jouyssance obligée et contrainte par le besoing, et qu'*on* a, et en sa volonté et en sa fortune, la force et les moiens de s'en passer. (Essais III- 946)

（文例 29）

On incorpore la cholere en la cachant, comme Diogenes dict à Demosthenes, ... (Essais II- 697)

上記の文例28，29に対応する80の ils の中から用例を二つ引用しよう：

（文例 30）

Ils adorent tout ce qui est de leur costé ; ... (Essais III-989)

（文例 31）

Mais c'est folie d'y penser arriver par là. *Ils* vont, *ils* viennent, *ils* trottent, *ils* dansent, de mort nulles nouvelles. (Essais I-84)

以上が『エッセー』に於いて ils＝on が成立する第一の場合であるが，ここで on に関してしか殆んど見当たらない動詞の主要なものを掲げると次の様になる：

表 5

	voir	regarder	savoir	trouver	apprendre	sentir
ils	0	0	0	1	1	1
on	70	10	10	11	8	10

表5と表3を比較すると，voir, trouver, sentir に関してほぼ類似した結果が得られる。つまり，『エッセー』に於いても ils は知覚や観察を示す動詞と用いられていないのである。この場合 on は，用例を調査すると構文上の形式的主格と考えられ，このことは次の例文からも察知できる：

（文例 32）

Je croy que c'est ce mesme estat où se trouvent ceux qu'*on* voit défaillans de foiblesse en l'agonie de la mort ; (Essais II- 354)

（文例 33）

On void aussi certains animaux s'adonner à l'amour des masles de leur sexe ; (Essais II- 451)

上記の文例32・33に属する用例は，約200箇所に渡って認められる。

さて上記の表5の場合以外にも，on しか殆んど見られない用例が文脈的に認められる。『イタリア旅行記』の文例23～25の箇所で述べた on ——つまり「不特定のひとりあるいは数人」を示す on ——が『エッセー』ではおよそ650箇所見られる。こうした文脈では無論 ils は用いられない。例えば次に示す例のような場合である：

（文例 34）

Et tournant sa cholere en rage, commanda qu'*on* luy perçast les talons, et le fit ainsi trainer tout vif, deschirer et desmembrer au cul d'une charrette. (Essais-I-14)

（文例 35）

On demandoit à Solon s'il avoit estably les meilleurs loys... (Essais III-934)

（文例 36）

On recourt à eux (=Argippées) pour apoincter (="régler") les differens qui naissent entre les hommes d'ailleurs. (Essais II- 599)

上記の文例34～36では，on は「ある人が」，「誰かが」の意味をもっていると考えられる。

III の 2

さて既述のある文脈に限って成立すると考えられる ils（総数約150）に関して，Voizard は次の様に語っている：

> D'après un usage que l'on rencontre dans la syntaxe grecque et la syntaxe latine, Montaigne fait parfois rapporter le pronom *il*, non pas au substantif dont il tient la place, mais à l'idée ou aux personnes que représente ce substantif: "Parmi ces nations que si a pleine bouche nous appellons barbares, la coutume porte qu'*ils* n'entreprennent guerre sans l'avoir premierement denoncée" (Etude sur la langue de Montaigne p. 98)

上記の文例では，ils の意味を把握する上に於いてキーポイントとなるのが ces nations que si a pleine bouche nous appellons barbares の部分である。この場合，Ⅲの1で考察してきた ils とはかなり異質と考えられる。そうした前提条件に置かれて初めて成立するのである。上記の Voizard の見解に於いては，この場合どの程度 on が使用されているかに関して書かれていないが，その総数は少ないが（およそ 50）on もこうした文脈で用いられているのである：

（文例 37）

> En certain Royaume de ces nouvelles terres, au jour d'une solemne procession, auquel l'idole qu'*ils* adorent est promenée en publiq sur un char de merveilleuse grandeur, ... (Essais II-342)

（文例 38）

> Aristote dict qu'en certain nation où les femmes estoient communes, *on* assignoit les enfans à leurs peres par la ressemblance. (Essais II-741)

(文例 39)

Où *ils* combatent en l'eau, et tirent seurement de leurs arcs en negeant. (Essais I-111)

(文例 40)

Où *l'on* pleure la mort des enfans et festoye *l'on* celle des vieillarts. (Essais I-111)

(文例39・40に於ける Où は「ある国では」の意)

上記の文例37と38，文例39と40に於けるそれぞれの ils と on は——Ⅲの1の場合と状況は異なるが—— ils=on がこうした場合に成立することを表わしていると言えよう。(2)

以上が『エッセー』に於いて ils=on が成立する第二の場合である。

IV

さて以上，第Ⅱ章，第Ⅲ章に於いて考察してきた結果，『イタリア旅行記』では ils は「不特定のある集団」を，『エッセー』では「一般に人々」を示す第一の場合以外に，ある前提条件と共に成立しうる第二の場合が認められた訳である。

ここで想定しうるのは，『イタリア旅行記』に表われている ils は，『エッセー』に於ける前提条件をもつ第二の場合の ils と同じ性質のものではないだろうか，という点である。この点に関して，二つの作品の内容的特色を考慮しながら，次の様に解釈すべきであろう。

第Ⅱ章で既述した様に，『イタリア旅行記』は，モンテーニュ一行が各地を訪れ，各都市の様子を記述する紀行文としての特徴をもっており，作品中に必らず彼らが訪れる都市名が明記されてある。例えば次の文例はそのひとつである：

Nous partimes delà après des-juner et nous randimes sur les deux heures après midi à VANGUEN, deux lieues,... (J. de V.-1147)

ある都市から次の目的地へ行く場合，上記のような表現が見られる。例えば，彼らが Florence に到着してから次の目的地たる都市にたどり着くまでの不定的 ils は「les habitants de Florence」と解釈できる訳である。結局そこでは都市名の明記という前提条件を通じて ils が成立していると言えるのである。もし文例 37，39に於いて，国を示す語や表現がなければ ils は成立しえないのと同様に，『イタリア旅行記』に於いても都市名の明記という条件がなければ ils は成立しえないだろう。

以上によって，第Ⅱ章で取り扱った『イタリア旅行記』の ils と第Ⅲ章の 2 で扱った ils（前提条件をもつ）とは，ほぼ等しいと考えるのが妥当であろう。

それに対して，全く何らの前提条件もなく「一般に人々」を意味する不定代名詞 ils が——第Ⅲ章の 1 で見た様に——存在した訳であるが，その ils にしたところですべての場合に関して on と同等の価値を持つ訳ではなく，例えば「不特定なひとりあるいは数人」を示す場合には使用不可能である。

『エッセー』と『イタリア旅行記』に見い出される前提条件をもつ ils は合計約 360 存在するのに対して，「一般に人々」の意味をもつ ils は 80 しか見当たらない。つまり後者の場合より前者の場合においてモンテーニュは ils をよ

表 6

	イタリア旅行記		エッセー（第一の場合）		エッセー（第二の場合）	
	ils	on	ils	on	ils	on
一般に人々	／	○	○	○	／	○
不特定なある集団	○	○	／	○	○	○
不特定なひとりあるいは数人	／	○	／	○	／	○
	(a)		(b)		(c)	

り好んで用いた形跡が窺えるのである。『イタリア旅行記』に関して ils が多く見られるのもそうした傾向によるものと考えられる。

以上述べた ils と on の対応を表にすると前頁の様になる：

以上の考察から，少くともモンテーニュに関する限り次のことが言える：

ils の不定的用法について特筆すべきは表6の(a)(c)の場合に使われている完全に不定的価値をもたない ils であって，この ils が on と対応している場合（「不特定なある集団」を示す），かなり好んで用いられた傾向が窺える。ところが表6の(b)の場合に使われている完全に不定的な価値をもっている ils が on と対応している場合（「一般に人々」を示す）は少なく，on に対して10分の1程度であり，Gougenheim の語る様に他の16世紀作家たちよりこの傾向は著しいとしても差程[3]好んで用いられた形跡はなかろう。

註(1) Voizard 著《Étude sur la langne de Montaigne》p. 97～p. 98. Gougenheim 著《Grammaire de la langue française du seizième siècle》p. 70, Vogel 著《Syntaxe historique de la langue française》p. 48 参照。

(2) この場合，Ⅱの3）で述べたことと矛盾しない。『イタリア旅行記』では ils は元来文脈上，「都市の住民」の意味を備えており，途中で改めて他の国名や地名が明記された場合，当然「その国あるいは土地の人々」を示す訳だから on が用いられ ils を使うことは不可能である。それに対し『エッセー』では本来そうした制限はないから，国名や地名が文中に明記された場合 ils は on と同様に「その国あるいは土地の人々」を示しうる訳である。

(3) Gougenheim 著《Grammaire de la langue française du seizième siècle》p. 70 参照。

——関西学院大学博士課程——